

「もいっかいやって、バイオリンでびゃあああーってひいだよ」

7月1日、弘前市の養護老人ホームでのアウトリーチ終了直後。「青い海と森の音楽祭」顧問で



国内の楽団をけん引してきたバイオリニストの矢部達哉さんに、高齢の女性が生声をかけた。突然の津軽弁に矢部さんが一瞬戸惑った。「びゃあああーですか!」。少し間を置いて、矢部さんは

巨匠から継いだ「種まき」

① 原点にかえる旅

静かにバイオリンを構え、再び弓を走らせた。ストラディバリウスの豊かな音色が会場を包み、人々の顔に再び笑みがこぼれた。

こうした心のふれあいは、矢部さんが若き日に体験した「音楽の原点」に通じる。「音楽をするときはいつでも全力投球。小澤さんから学んだことです」

1993年、指揮者の故・小澤征爾さんと世界的チェリストのムステイスラフ・ロストロポヴィッチさんと共に「キャラバン」と呼ばれる演奏ツアーに参加。コンサートホールもない地方の小さな町を一週間ほどかけて回り、寺のお堂や体育

館、その辺の広場などで一日3回コンサートを行った。

連日30度を超す猛暑。演奏するコンディション

としては劣悪だった。だが、小澤さんとロストロポヴィッチさんの集中力は全く途切れることがなかった。何より、観衆

が、小澤さんとロストロポヴィッチさんの集中力は全く途切れることがなかった。何より、観衆



として居合わせた高齢者や子どもたちが微動だにせず演奏に聞き入っていた。「何が素晴らしいかって、聴衆が誰も巨匠2人のことを知らないこと」と矢部さん。初めて聴く音楽に心を動かされている。「この尊さこそ、音楽が持つ力だと矢部さんは実感した。」

「またキャラバンをやりたい」と願いつつも、自身のキャリア形成や家族を養うことなどを優先せざるを得なかった。30年の年月がたち、50代になった頃から心に眠っていた思いがふつふつと再燃した。「だからね、沖

「びゃああーってひいでよ」。アウトリーチ終了直後、演奏を聴いていた女性からのリクエストに応える矢部さん(撮影・高田春菜)

澤(のどか)さんと隠岐(彩夏)さんが青森に連れてきてくれたことに感謝しているんです」

矢部さんにとって、青森での活動は単なる演奏ではなく、未来の音楽文化を育てる「種まき」だ。

「10年もしくは20年か、時間はかかるかもしれないが花を咲かせてほしい」。かつて小澤さんから受け継いだ「全力投球」の精神を胸に、矢部さんはこれからもメンバーと共に芽を育て続ける。

深い余韻を残しながら青い海と森の音楽祭が閉幕して1カ月あまり。演奏家が学校や施設などを訪れ、音を届けたアウトリーチを通じて、心が響き合う瞬間を振り返る。

(加藤桃子) ※この連載は4回続きます。